

第 92 回 歴史リレー講座「世間虚仮・唯佛是真の生き方」 山田 法胤師 (R4.5.15)

今回のタイトル世間虚仮の「世」はもともと 卅 という字で、世の中は 30 年で壊れて新しくなるという意味です。世俗の「俗」も、世の中や人間は必ず苦しい状態から楽な方へと谷水のように流れていくことを表わします。長引くコロナ禍も、地球が狭くなり人間が労せずして行き来できる時代ゆえの災いでしょう。

仏教伝来は 552 年、百済の聖明王から贈られた仏像と経典を欽明天皇が蘇我稲目に与えたことが始まりです。しかし、直後に疫病が流行したため、仏教導入派の聖徳太子らと反対派の物部氏との宗教戦争へと発展。勝利した太子が建てた寺が大阪の四天王寺です。四天王は仏法を守護する重要な眷属神で、東大寺の正式名も金光明四天王護国之寺です。近頃は一部の学者が「聖徳太子不在説」を提唱していますが、「日本のお釈迦様」という私の太子への思いはゆるぎないものです。特に、十七条憲法の中で私にとって重要な項目が第一条（和を以て貴しとなす…）、第二条（篤く三宝を敬え…）、第十条（忿を絶ち、瞋を棄てて…）です。

ちなみに、私が住職を務める奈良市の喜光寺は 721 年に行基菩薩によって創建されました。明治の廃仏毀釈を乗り越えて現在に至ります。行基菩薩は聖武天皇の命を受けて全国各地に国分寺を創建し、大和国統一に尽力した僧です。つまり、ここ奈良こそが国造りの原点であり、文化が始まり花開いた地なのです。

太子は父である用明天皇の病氣快癒を願って薬師如来を本尊とする法隆寺を創建したものの、ほどなく天皇は崩御。次の崇峻天皇は蘇我馬子の陰謀で暗殺され、593 年には推古天皇（敏達天皇の皇后）が即位。当時二十歳の太子が摂政に任命されました。太子は政務のすべてを取り仕切り、603 年には冠位十二階、翌年には十七条憲法を制定。また、渡来僧の慧慈と慧聡を師と仰ぎ、『三経義疏』（法華経、勝鬘経、維摩経の解説書）を著しました。さらに天武天皇の時代に飛鳥の川原寺で写経が初めて行われ、692 年の持統天皇時代には寺の数も 500 以上に増えています。称徳天皇の時代には印刷の始まりの木版印刷によって盛んになりました。

飛鳥時代は朝鮮半島の文化が積極的に取り入れられ、寺の増加に伴って仏像の需要も高まります。仏像はもともと銅で造られており、銅と同時に仏師などの技術者や文化も日本に導入されました。法隆寺に百済仏が多いのも肯げます。607 年、聖徳太子は対等な交流を目的に大陸の隋へ小野妹子を遣わしますが、書状の内容に皇帝煬帝が烈火のごとく怒り、日本を「粟散邊土」（粟粒のような弱小国）と侮ったといひます。その煬帝も 616 年に起きたクーデターで暗殺されてしまいます。

645 年の大化の改新では蘇我一族が滅亡した際、貴重な歴史書が焼失するという事態に至りました。そこで、第 40 代天武天皇は改めて日本の成り立ちを記録に残すため太安万侶に『古事記』を、舎人親王に『日本書紀』の編纂を下命。『古事記』は 33 代推古天皇まで、『日本書紀』は 41 代持統天皇までの歴史書を編纂しました。『古事記』は語り部（稗田阿礼）からの聞き書きが基本でしたが、安万侶は漢文の知識に乏しかったため、完成後もその正しい解釈は困難でした。ようやく解読したのが江戸時代の国文学者本居宣長です。なお、『日本書紀』「片岡山飢人伝説」の舞台はここ王寺で、飢人として描かれる達磨は禅宗の始祖です。

600 年代は朝鮮半島、大陸ともに内乱状態でしたが、中国との交流は遣唐使を務めた菅原道真の時代まで続きました。その特徴は法隆寺、薬師寺などの様式に如実に表れ、正倉院はその代表といえます。道真といえば、藤原氏から妬みを買ひ、九州大宰府に左遷され無念の死を遂げた（903 年）歴史は有名です。

最後に、法隆寺の玉虫厨子に釈迦の前世を描いた物語画の「施身聞偈」は、身を施して偈（仏の教え）を聞くという意味です。物語のなかでは、修行中の釈迦に「諸行無常…」（すべてのものは移り変わる）という声が聞こえてきます。これを日本語の和様のいろは歌にして、「いろはにほへとちりぬるを」と 48 字の歌にしました。これらはすべて世間虚仮です。ですから「唯佛是真」（仏の教えは真実）なのです。この世は「生滅滅已」であり永遠に続くものなど存在しません。「うみのおくやまけふこえて…。この世の苦しみを乗り越えてこそ悟りが開ける。いろは歌を理解できれば、お釈迦様の真実の教えに近づけるということです。